

2) 明治から大正

明治、大正期にも多くの洪水が起こり、中でも明治23年(1890)の洪水では久慈川および里川で堤防が決壊し、死者・行方不明500余人、住家流出1800戸、床上浸水1万余戸の甚大な被害をもたらしたとされ、この洪水では河口の久慈浜の漁船が人命救助に活躍したとされている。本格的な堤防建設は行われていないが、霞堤などの建設がこの時期から始められた。

大正9年(1920)の洪水の後には、関係町村からの治水のための陳情や請願が国・県に出されたが、その時点では具体的な対策の着手には至らなかった。

表 3-2 明治大正時代の主な水害

年月(西暦)	被害状況
明治 10 (1877)	久慈川、茂宮川、里川大洪水
明治 23. 8. 5 (1890)	久慈川、茂宮川、里川 流出家屋1,800戸、死者500余人、床上浸水1万戸
明治 32. 7. 25 (1899)	大洪水のため久慈郡戸村小島、西小沢村、堅磐、世矢、坂本、東小沢村大被害を受ける
明治 35. 9. 25 (1902)	大風水害(風速34m)
明治 39. 7. 15 (1906)	大洪水
明治 43. 8. 11 (1910)	溺死者119名、流出家屋37戸、久慈川、里川、山田川で堤防決壊
明治 44. 7. 5 (1911)	幸久村河合地先6メートル増水堤防決潰して浸水家屋50戸
明治 44. 7. 26 (1911)	久慈郡幸久村、那珂郡瓜連町大洪水
大正 2. 8. 27 (1913)	久慈郡幸久村を中心に大洪水
大正 3. 9. 14 (1914)	久慈郡幸久村を中心に大洪水
大正 6. 10. 1 (1917)	太田町、久慈町を中心に大洪水、河合地先久慈川2文3寸余となる
大正 9. 10. 1 (1920)	風水害、坪当たり降雨量4石2斗8升小沢郷一帯泥海、久慈町発動機船出動救助、 両陛下御救恤金下賜
大正 13. 9. 17 (1924)	死者行方不明90人、流出家屋206戸、全・半壊家屋273戸、床上浸水5,618戸 久慈川、里川を中心に大洪水

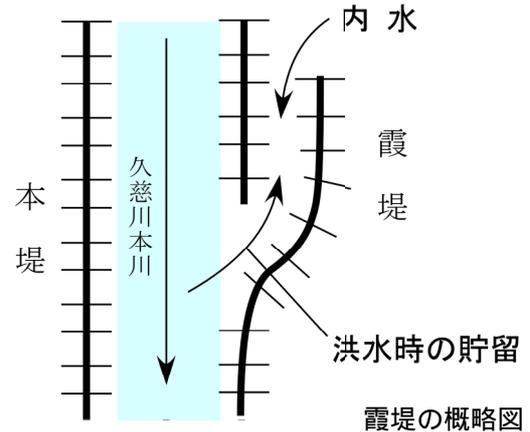
注：印は大洪水と伝えられている洪水

かすみでい
霞堤

本川の流れる方向に対し堤防が連続せず、上流側に向かって開口部がある堤防の形態が霞堤と呼ばれる。これは洪水を逆流させて弱めたり、後背地に貯まった水を排水させるという複合的な目的をもって造られた。久慈川の霞堤は昭和初期ぐらいに造られたとされるが、詳しいことはわかっていない。常陸大宮市（旧大宮町）富岡橋付近及び支川の里川には霞堤の形を残している堤防を今も確認できる。



富岡橋上流に霞堤の形を残している堤防
(常陸大宮市, 旧大宮町) (平成 15 年 11 月撮影)



霞堤の概略図

みずや
水屋

久慈川下流の洪水常襲地帯では、かつて、蔵や隠居の建物の土台を母屋よりも一段高く設けて、安全を図った。

とくに蔵は収穫物や貴重品などを保管する場所として重要で、水屋と呼ばれた。このほかにも、納屋の軒先に舟を吊るしておいたり、馬塚を設けたりして非常の時に備えたという。



水屋の敷高は、手前の地面よりも一段と高くなっている。

亀下地区の水屋(東海村)

(平成 14 年撮影)

共盛蚕組合記念碑 那珂郡木崎村門部字下河原（現 那珂市門部字下河原）

久慈川沿いは地味肥沃な良田だが、「頻年水害を蒙り其惨状言うに忍びざるものあり」という状況であったので、有志がこれを心配し、洪水に強い「副産物を興さむ」として苦辛の結果、この土地に蚕桑が適していると考え、明治 39 年 1 月 27 名で共盛蚕組合を創立し、同 43 年官の奨励により補助を受け、大正 6 年には繭まゆの売り上げ 1 万余円に達し、家計を豊かにしたという。